

2017年の浦和西高校の文化祭で販売した文芸部誌「蜃気楼 2017」のペンネーム琵琶法師の作品「余り者には福がある」に八千字の落丁がありました。224ページ、下の段、八行目から九行目の間に下記の文章が入ります。大変申し訳ありません。

始めた。しばらく歩いていると、起き出してきた農民達の姿が、和やかな田園の風景にまばらに混ざり始める。どの農民達も、決して豊かではなさそうな服装に体格だが、その顔はどれも自分の生活に満ち足りた爽やかな笑顔だった。富める限りに富みながらまだ、飽くなき欲望の言いなりに座敷わらしまで欲する長者とは大違いだ。陰陽師は一つまた一つと家を調べていく。陰陽師は妖怪の気配を敏感に感じることができるので、多くの場合は近づくだけでその家に妖怪がいるのかどうかわかる。だが一応は長者との約束があるので、万が一に備えて全ての家を内部まで除き込んで一つ一つ確かめる。人がいた場合いぶかしがられはするが、何をしているんだと問い詰められることはない。陰陽師は別に、村人との友好的な関係を望んでいるわけではないので、不審に思われるのは構わない。と考えていた。強いて弊害を挙げれば、疑われることで調べごとが難航することがあったりするが、この村に限ってそれはないだろう。良く言えば平穏な、悪く言えば平和ぼけした村なのだ。きっと長らく泥棒騒ぎもなければ、口減らしをしなければ乗り越えられないような、飢饉に見舞われたこともないのだろう。だからこそ妖怪と言う恐ろしいものが多いと噂されているにも関わらず、当の村人達は幸せそうなのだ。平和が当然。と頭が麻痺している。だが陰陽師にはそれは、眠りながら、幸せな夢を見ながら、奈落の底へと落ちていくような危険なことに思えた。だが陰陽師は「村人を妖怪の魔の手から救う」などと言う崇高な理念の下、行動している訳ではない。陰陽師はただ「妖怪退治」だけが目的であり、その行為が他人にどう影響するかは気にも留めない。確かにこんな村人達を危ういと思いはするが、「救う」だの「浄める」だの綺麗事を並べ立てるつもりはない。感謝は必要としないし、同じように憎しみも恨み言も受け付けない。そして妖怪であるならばどんな命乞いにも弁明にも耳は貸さない。そうして陰陽師は生きてきた。陰陽師が家々を調べ、七つか八つかめの家に近づいた時だった。陰陽師は突然首筋に生きた魚がすり寄ったような、寒気と不快感を感じた。それは近くに妖怪がいる時にいつも感じる酷く気分の悪い感覚だった。この家に妖怪がいるのかと、陰陽師は早足で家に近づいた。だが妖怪はその家の中ではなく、玄関先に置かれた水瓶の陰に立っていた。ひょこりと水瓶の後ろから現れたのは、二匹の小鬼達だった。姿形はよく似ているが一匹は白髪、もう一匹は黒髪の対象的な二匹だった。小鬼達の不幸は、よりもよってこの日に余平を訪ねて来たことと、余平の家に近づく男なら余平の知り合いなのでは。と疑いもせず近寄ってしまったことで起こった。

「余平ノ仲間？」

「余平ニ用事？」

「余平ミタイニ視エルンダネ」

「余平以外ノ視エル奴、初メテ」

小鬼達は自分達をしっかりと見据える男が、間違いなく自分達を視えているのだと認識し、口々に訪ねた。

だが男はそれには答えず、無言で右手の人差し指と、中指をまっすぐ揃えてたて、それをまるで刀のように見立てて、小鬼めがけて真一文字に振り切った。その様子をきょとんと眺める小鬼達。一呼吸分の間を置いて、小鬼達の胸に深い横一筋の切り傷が開き、鮮血がほとばしった。小鬼達は互いに重なるように崩れ落ちた。結局小鬼達は意識を手放すその瞬間まで自分達に何が起こったのか、理解することはなかった。

「よへい……」

陰陽師はとくとくと血の輪を広げる小鬼達の体を見据えたまま、小鬼達がしきりに連呼した名前を反芻した。まだ家の内部から、小鬼以外の気配がする。だが陰陽師は一旦それは置いておくことにした。それよりも、明らかに人間の名前である「よへい」と言う名前が、妖怪の口から出たことが気になったのだ。陰陽師は手っ取り早く、妖怪ではなく村人を見つけて聞いてみようと考えた。だが田畑の多い広い村のあちこちに、散らばって仕事をしている村人はなかなか捕まえ辛いものだった。しばらく探し回ってようやく陰陽師は、一人の村人を見つけた。その村人はまだそれほど、年のいっていない青年で垂れ目がちの明るそうな雰囲気的人物だ。垂れ目の青年は川原で、鼻歌を歌いながら農具を洗っていた。陰陽師は川の対岸から、その垂れ目の青年に声をかけた。

「もし。少しお尋ねしたいことがある」

しばらく垂れ目の青年は何も反応を示さなかったが、陰陽師が声をかけてからだいぶ経ったあと、はっとして顔を上げて尋ね返した。

「もしかしておらに言ってっぺかー？」

「ああ。この村の人とお見受けしたが……。この村に『よへい』と言う男はいるか？」

陰陽師の問いに、垂れ目の青年は唇をつんと尖らせて、斜め上を向きしばらく考える素振りを見せた。

「この村には『よへい』さんは五人位いっぺ。どの『よへい』さんだべか？」

「わからない」

「……………いや、だったらおらには、なおさらわからないべ……」

垂れ目の青年は陰陽師の即答に、困ったように眉尻を下げた。陰陽師はその姿に慌てて、訂正した。

「すまない。妖怪が視える『よへい』だ」

陰陽師の言葉に再び、垂れ目の青年は思案顔を見せる。だいぶ長い間、青年は考え込んでいた。ぎゅっと目を瞑り、額を押さえて唸る。そして誰かを思い出したのか、手を打った。

「そう言えば、おらの隣ん家の余平って奴が子供の頃、一人でずっとしゃべったりしてて、あいつは妖怪に取り憑かれてるんじゃ。なんて話をしたなあ」

青年は腕を組んで、懐かしげに頷いた。

「そいつはどんな奴だ？」

「え？ ああでもあいつは大きくなってからは、全然そう言うことはなくなったし……」

「構わないから教えてくれ。どんな奴だ？」

「どんなって言われても、普通の……」

陰陽師はこの村で二回目の夜を、一人迎えていた。垂れ目の青年に聞いた「余平」と言う青年の容姿の特徴は、陰陽師がこの村に来たとき一番初めに、無花果の木の下で出会ったあの青年にことごとく当てはまった。性格もどうやら陰陽師の抱いた印象とそう変わらないようだ。余平の隣人と言う垂れ目の青年以外にも、何人かに聞いて回ったところ、「独り暮らしなのに家で、誰かとしゃべってる」とか「あいつは運が良くて、畑が凶作になったことがない」と言った証言が得られた。「余平」と言う男の家に座敷わらしが憑いているのは、間違いないだろう。それにしても不思議な縁を感じる。この村で初めて会った青年が、長者お目当ての妖怪の宿主で、そして陰陽師と同じ力を持っていると言うのだから。陰陽師は夜空を見上げて星の光に、不機嫌そうに目を細めた。

「すっかり暗くなっちゃったべ」

余平は畑で取れた野菜を片手に、もう片手に農具を持って、家路を急いでいた。適当に済ますつもりだった雑草取りに、つい熱を込めすぎてしまって、気づけば日はとっぷり暮れて、辺りは濃紺と紫を混ぜた夜がひしめいていた。やっと家に到着した余平は、愕然とした。玄関前に血溜まりを描く、二匹の友達の体。余平は道具も食物も放り出して、小鬼達に駆け寄った。おびたらしい出血の上から、小さな体を担ぎ上げながら、余平は思った。一体何時から彼らはここでこうしていたのだろう。普通の人には視えない彼らは、誰にも見つけて貰えないまま、どれだけの間血を流し続けたのだろう。幸い小鬼達は事切れてはいないが、日暮れの寒さにすっかり冷えきっていた。余平は両肩に小鬼の体を担ぎ上げると足を使って、乱暴に戸を引き開けた。そして余平の行動に目を丸くしているお内ちゃんに、叫んだ。

「お内ちゃん、布団ひいて灯りつけてくれ！」

「わ、わかったべ」

余平の剣幕と傷ついた小鬼の姿に戸惑いつつも、お内ちゃんは布団を広げて灯りを灯す。余平は布団の上に、小鬼の小さな体を並べると再び草鞋を履いて家の外に飛び出す。そして

「おら、御狐様探してくるべ！ お内ちゃん、小鬼ちゃん達のこと、頼むべ！」

そう言い残すと、宵闇の中へ駆け出した。

その夜御狐様は、山の大木の根元に作った子狐達との巣の前で、人の姿で御猪口を傾けていた。月の光と、膝に丸まる子狐達の毛並みのさわり心地を肴に、ほろ酔いに浸っていた。だがそんな粹な雰囲気破って、友人の悲鳴に近い声が聞こえた。

「御狐様、見つけたべ！」

「あらあ？ どうしたのお、余平」

あくまで優美に御狐様は問いかけるが、余平には説明する余裕すらないようで、切羽詰まった顔で懇願される。

「と、とにかく、今すぐ来て欲しいだよ！」

「……わかったわぁ」

御狐様は余平の様子に何かを感じとり、事情はさておき走り出した余平の後を追った。その後ろから、子狐達が転がるようについてくる。余平は山を駆け降り、畦道を家に向かって全速力で走った。御狐様は何も言わずそれに続く。やがて余平の家にとどり着くと、その前には野菜や農具が乱雑に散らばっていて、余平がどれ程慌てていたのかが窺えた。余平に従って御狐様が見たのはなかなか悲惨な姿の小鬼達と、その横に青い顔をして座っているお内ちゃんの姿だった。

「一体何があったのお？」

御狐様の言葉に余平は首を横に振る。

「わかんねえべ。帰って来たら玄関の前に倒れてたんだべ……」

その言葉に続けるようにお内ちゃんが、蚊の鳴くような声で呟いた。

「おら……、おらがちょっとでも家の外に出てみれば……」

小鬼達が切られるのを止めることはできずとも、せめて小鬼達が寒さに冷えきる前を見つけることができたのではと、自責の念に駈られるお内ちゃんを余平が慰める。

「そんなことないべ。もし小鬼ちゃん達を切った奴と鉢合わせて、お内ちゃんまで怪我したら小鬼ちゃん達、もっと悲しむべ」

「余平の言う通りよお。こんな近くでことが起こったならぁ、お内ちゃんにまで被害が及ばなかったのはぁ、不幸中の幸いよお」

そう言うと御狐様は小鬼の側に腰を下ろすと、小鬼の傷口をそっと撫で始めた。

「ちょっとお、治すのに時間かかりそうねえ」

御狐様は顔を歪めた。

「やっとお、どうにかなったわねえ」

すっかり傷の消えた小鬼達の体を前に、御狐様は額の汗を拭った。外はもう、ほの暗い景色に朝日が溢れ始めていて、余平とお内ちゃんは壁にもたれて寝息をたてていた。その足元に子狐達も眠っていた。御狐様は余平を起こさないように、その隣に眠るお内ちゃんを揺り起こした。

「うう……」

「起こしてごめんなさいねえ。でも人間の余平をあんまり起こしておくのは、忍びないのよお」

「大丈夫、わかってるべ。ふあああ」

お内ちゃんは欠伸を噛み締めながら答えた。

「小鬼ちゃん達はだいぶ回復したけどお、なにぶん出血の量が量だからぁ、まだゆっくり眠らせてあげてえ」

「おう」

「じゃあ私たちはあ、お暇するわあ」

そう言うと御狐様は子狐達を抱き抱えて、去っていった。お内ちゃんは小鬼達の顔を除き混む。血の気の戻った顔は、健康的な桜色になっていて、二匹の回復の程を感じさせた。それを見てお内ちゃんは、やっ  
と罪悪感から解放された気がした。心が楽になると、緊張の緩んだ体に明け方の寒さが浸透する。お内ちゃんにはたいして気にならない程度の寒さだが、眠っている余平には少し心配な寒さだ。お内ちゃんは掛け布団は引っ張り出すと、そっと余平にかけた。そして再び余平の横に座って目を閉じた。微睡みが小さな家に満ちる。

余平はその日、珍しく鶏の声ではなく、仄かな寒さと肩に感じる僅かな重みに起こされた。眠い目を擦りながら部屋を見渡す。毎朝見上げる天井ではなく、いつもより高い視線の風景。どうやら自分は座ったまま、寝ていたようだ。しかし何故。余平はぼーっと考えた。ゆっくりと脳裏に、昨晚の出来事がよみがえってくる。はっとして余平は立ち上がると、余平の粗末な布団で静かに横たわっている小鬼達に駆け寄った。二匹の口元に手のひらをかざすと、すーすーと規則的な呼吸が感じられた。余平は胸を撫で下ろした。

「...うう...、おはよう余平」

「お内ちゃん、おはようだね。なあ、御狐様知らねえか？」

「御狐様なら明け方帰っていった。小鬼ちゃん達は安静にしとけて」

「なるほど。合点承知だね！　でもおら畑にいかなきゃなんねえだ。ただ正直、お内ちゃんと小鬼ちゃん達だけで、残すのは.....」

「大丈夫だね。行ってこい」

「でも小鬼ちゃん達を切った奴がまたやって来るかも.....」

「いいから行け」

「でも.....って痛い痛い！　蹴らないで欲しいべ」

「阿呆。小鬼ちゃん達のこと仕事で滞ったりしたら、小鬼ちゃん達が一番悲しむべ」

「.....わかったべ。行ってくるな」

そうして渋るも、多少強引に余平は送り出された。昨晚家の前に散らかしっぱなしにしていたはずの、農具や野菜はきれいにまとめて家の壁に立て掛けてあった。

「朝まで小鬼ちゃん達の手当てしてくれただけでなく、こんな気配りまでしてくれるなんて、御狐様は優しいなあ」

余平がそう独り言を言うと、余平の腹の虫がぐうう、と答えた。

「そう言えば昨日何にも食べないで寝ちゃったべ」

余平は家の近くに生えている木の実を頬張り、空腹を抑えながら畑へ向かった。

日が空のてっぺんにあぐらをかいた頃、陰陽師は錫杖を鳴らしながら歩いていた。決して早足と言う訳で

も、とびきり足音をたてている訳でもないが、その姿はすれ違うものが腰を抜かすほどの迫力があつた。陰陽師は丸半日かけて座禅を組み、精神を統一したあとだった。相手は取るに足らない妖怪一人だが、その宿主は陰陽師と同じ力を持っているのだ。用心に越したことはないだろう。陰陽師は一心に「余平」と言う男の家に向かっていた。

余平が畑に出てからどれ程時間が経ただろう。余平の家では、余平の心配したようなことは今のところ起こらず、平和な時が刻まれていた。お内ちゃんは余平のいないいつものときのように、膝を抱えて体を丸めて座っていた。いまだに眠り続ける小鬼達を、ただ意味もなく眺める。そんな状況がしばらく続いた。日がにわか傾きかけた頃、小鬼達ももぞもぞと体を動かし始めた。息苦し気にしばらく唸り、やがて二匹は薄く目を開いた。

「だ、大丈夫だべか？」

お内ちゃんは慌てて小鬼に近寄る。小鬼達は体を起こすと、不思議そうに辺りを見渡し始めた。

「ここは余平の家だべ。安心するといいべよ」

お内ちゃんは小鬼達に微笑みかけた。小鬼達はお内ちゃんの言葉にきよんと首をかしげた。そしてはつとして、自分達の胸元を恐る恐る確かめた。そして、そこに何の傷跡もないのを見て再び首をかしげた。お内ちゃんはそんな二匹の姿に笑みを溢しながら、二人の頭を撫でて言った。

「傷なら御狐様が治してくれたべ。もう怖くないべよ」

小鬼達はお内ちゃんの言葉をしばらく頭の中で吟味してから、お内ちゃんの腕に飛び込んだ。涙こそ流さないが、震える二匹の背中をお内ちゃんは優しくずっと撫でてやった。長い間そうしていた。日が空の半分の半分まで傾いた頃だろうか。やっと落ち着いた小鬼達は、お内ちゃんから離れた。そして思い出したように、叫んだ。

「余平ドコ！ 知ラセナキャ！」

「余平ヲスゴク怖イ奴ガ訪ネテ来タノ！」

どうやらこの二匹には、言葉が被ると言うことに対する抵抗感はないらしく、二匹同時に叫んで、どちらも引かない。

「あ、えっと……一人ずつもっかい頼むべ」

そのせいで、お内ちゃんは切羽詰まった二匹の言葉を両方とも聞き逃してしまい、もう一度言ってくれと頼んで、せつかくの緊迫した雰囲気壊さざるをえなくなった。しばらくの奮闘の末、やっと二匹の言わんとするところを理解して、余平の居場所を教えて送り出す。一人になったお内ちゃんは自分ににじりよる、暗雲に気づきはしなかった。余平も、小鬼達もいなくなった家で、お内ちゃんはまたいつものように体を縮めて部屋の隅に落ち着いた。そのまま何の変化もない姿で、ときを過ごすお内ちゃんの様子は、端から見れば時間が止まってしまったかのようにも見える。日の光に赤色が溶け出した時分、余平の家の戸が叩かれた。

「余平殿、いらっしゃるか」

余平の知り合いだろうか。それにしてもはずいぶんと物々しいしゃべり方だ。お内ちゃんはそう思った。あえて出迎えるようなことはしない。見えない人間からしたら、勝手に戸が開く。なんて怪談話もいいところだ。そうしてお内ちゃんが無視を決め込んでいると、戸を叩く音が止まった。帰ったのだろうか。と思ったのもつかの間、戸を叩いた人間は戸に手をかけて、許可も得ずに戸を開け始めた。ゆっくりと引かれる戸を見ながら、お内ちゃんはため息をついた。

「泥棒だべか？ 仕方ねえ、ちょっぴり脅かしてやっぺ。」

だが開け放たれた戸の向こうに立つ男と瞳があった途端、お内ちゃんの背に恐ろしくひんやりとした汗が伝った。男に見覚えはないが、その冷たく鋭い視線には心当たりがあった。たった数日前に感じた、あの敵意を伴う視線だ。男はじっとお内ちゃんを見据えると、静かに錫杖を構えた。そして抑揚のない声で、うまく聞き取れないがお経のようなものを唱え始めた。その音の響きは小さな家の中で幾重にも反響して、そして恐ろしく大きな、不快な音になってお内ちゃんに襲いかかった。お内ちゃんは咄嗟に耳を塞ぐが、その手のひらを浸透してまでその音は襲ってくる。耳障りなその音を聞き続けると、頭ががんと痛み出す。それに頭の中でこだまする鼠の断末魔のような、きいきいという音も伴って、吐き気や寒気までし初める。お内ちゃんは、たまらず膝を折り崩れ落ちる。だが男は蔑むような目でお内ちゃんを見下したまま、呪文を唱え続ける。お内ちゃんはどうにかその不快な音を遮ろうと、体を引きずるように囲炉裏に近づく。そしてその中にこんもりと居座る、昨晚の灯りの燃えかすを男の顔目掛けて撒き散らす。男はその灰を吸い込んだのか激しく咳き込む。音が止まり、お内ちゃんの体が軽くなる。お内ちゃんはどうにか逃げようと、玄関に向かって一縷に走った。男は目に侵入した灰に視界を奪われながらも、なんとかその姿を目視する。そして痛む喉に鞭うって、大声で呪文を叫ぶ。瞬間、突如として家の中に発生した竜巻が、お内ちゃんを巻き込み吹き荒れた。竜巻はお内ちゃんだけでなく、鍋や布団、家の壁まで飲み込んで轟音をたてて渦巻く。お内ちゃんは竜巻の中から抜け出せず、巻き込まれた物と何度も衝突した。やがて何度目かにお内ちゃんの頭を鍋が直撃し、お内ちゃんは意識を手放した。

陰陽師は忌々しげに喉をさすりながら、目の前に転がる座敷わらしの姿を睨み付けた。陰陽師と何度か深呼吸をし咳を抑えると、懐から御札を取り出した。紙にのたうち回るような不気味な朱色の文字は、陰陽師自身の血で書いた物だった。陰陽師はその御札の血文字が書かれた面を、座敷わらしに向けてかざすと再び呪文を唱えた。それは、音で相手の抵抗力を奪う呪文や、竜巻を起こす呪文とはまた異なった呪文だった。その呪文に呼応して、御札に書かれた文字と座敷わらしの体が光に包まれる。やがて光が座敷わらしの姿を覆い隠し、そして形を崩して光の粉になって御札の中に吸い込まれる。陰陽師はその御札を襟元にしまうと、家を後にした。その一部始終を見ていた人は誰もいなかった。木々の間を子狐が駆け出した。

時を少しばかりさかのぼる。余平はいつものように、畑仕事にせいを出していた。水を撒き、肥やしを土

に混ぜ混む。雑草を抜き、葉についた虫を取る。日差しが斜めになった頃夢中になる余り余平は、昼時を若干逃してしまい遅めの昼食を取っていた。畑で取れた野菜